



「阿蘇火山博物館展示室」

目 次

【論考・提言・実践報告】

企業ミュージアムとパフォーマンス

ペトロザイン テング・ナサリア/ジェフ・スノードン ……2

(翻訳) 株式会社ココロ 三田 武志

21世紀におけるミュージアムショップの在り方について

日本ミュージアム・マネージメント学会事務局幹事 松永 久 ……5

【時の話題】

産業再生機構に委ねられた「阿蘇火山博物館」の行方
第3回ミュージアムグッズ人気コンテスト 入選作決る！

日本ミュージアム・マネージメント学会事務局長 高橋 信裕 ……9

NPO法人企業ミュージアムの協会 亀田 訓生 ……12

【研究部会活動報告】

理論構築研究部会第1回研究会実施報告

理論構築研究部会長 高安 礼士 ……14

ミュージアム文化研究部会 共催フォーラムのご報告

日本ミュージアム・マネージメント学会理事 榎井 喜孝 ……16

【新刊紹介】

『スミソニアンは何を展示してきたか』

常磐大学教授 水嶋 英治 ……19

【インフォメーション】 ……20

論考・提言・実践報告

企業ミュージアムとパフォーマンス

ペトロザイン

テング・ナサリア (最高執行責任者)

ジェフ・スノードン (副館長)

ASPAC 2003

2003年3月、ペトロザインは、第4回アジア太平洋科学館会議 (Asian Pacific Science Centres conference) のホストを務めました。

世界各国から200を超える科学館や博物館の専門家が一同に会し、サイエンスステーション1で行われた演奏会の夕べに招待されました。“Meditacion” (フランス人作曲家ジュールズ・マスネ作曲) のバイオリン演奏が始まる (写真1) と会場内は静まりかえり、音楽に誘われて、とても趣き深い夕べが始まりました。続いて、マレーシアの躍動感に溢れる情熱的なダンスが始まり、ペトロザインのスタッフも参加し、ゲストと楽しい時間を過ごすことができました。賞賛の拍手が静まると、ゲストはヘリコプターシミュレーションに乗って、科学館の中心にあるオイルプラットフォーム (石油発掘現場) を体験しました。このシアタースタイルのプラットフォームでは、ペトロザインのスタッフが作業服に安全ブーツ、工事用ヘルメットを着用し、“作業員” にふんして案内をしました。ゲストは小グループに分かれ、“作業員” にふんしたスタッフは、拡声器片手に掘削作業や石油採掘者、他の労働者、掘削作業監督がそれぞれ石油採掘場でどのような役割を果たしているのか、またプラットフォームでの生活について、楽しくゲストの関心を引きつけながら説明していきました。

この夕べは1999年3月の開館から4年、スタッフが思考錯誤を重ねてきた一つの結果でもあり、また通過の一地点でもありました。開館直後は、科学館として第一線での為すべきことを模索する日々でし



ASPAC 2003 (写真1)

た。開館直後は“展示説明者”の意識の強かったスタッフたちも、今では立派な“ツアーガイド”へと成長しました。

ペトロザイン

ペトロザインは、石油産業に関する科学技術を表示の軸とした最新の科学博物館です。マレーシアの石油・ガス供給会社ペトロナスが運営する3施設の一つです。マレーシアの首都クアラルンプールの中心に堂々とそびえたつツインタワーの中、スーリア・ショッピングセンター内にあります。ペトロナスが運営する他の2施設には、最先端の設備を誇るダウン音楽ホールと芸術作品を表示するガレリペトロナスがあります。

ペトロザインの総面積は約9,000㎡、その約70%にあたる6300㎡が展示エリアです。展示エリアは現在2フロアに分かれており、広い展示スペースはジオラマ仕上げになっています。展示物、ジオラマ、シアター、シミュレーター、プラットフォームそしてインタラクティブ展示など、石油やガスに関連する展示はすべて1階に配置されています。来館者は、一方通行の導線にしたがい館内を回っていきます。館のプランニングチームは、来館者の数によりそれぞれのセクションに必要なスタッフの数を割り出し、ビジターサービス、展示プログラムチームへ配置していきます。観客と直接触れ合うスタッフには、さまざまな知識と常に円滑に進行する技術の向上が求められています。

ペトロザインブランド

館がオープンした直後、スタッフは石油産業関連の科学技術について、詳しい知識を得ていなかったため、運営計画チームを立ち上げました。今日では生活に不可欠な産業技術を取り扱う施設で、どのような展示手法が適切なのか思考錯誤を繰り返し、ツアーガイド方式を採用しました。スタッフは、知識偏重ではなく、同じ題材でもアプローチを変えることで、別の視点で考察・説明していくなど、日々学び続けています。

スタッフには、ツアーガイドとして常に学び来館者の記憶に残るような演出をしていくことが求められています。日々のトレーニングは不可欠で、経験豊富なスタッフを講師としたセッションがスケジュールにも組み入れられています。来館者に対してだけでなく、各展示エリアに配置されたボランティアスタッフに対しても、積極的に関わり信頼されるべきツアーガイドであることも求められています。

特に科学技術関連の知識を中心に、館内の展示物すべてに関する知識を会得していなければなりません。一方で、館内の展示と石油産業分野の科学技術との関連について、来館者と体験を共有していくことも重要視されています。リーダーは、トレーニングやこうした要求にこたえるため、意欲的かつ創造

的でありつづけなければなりません。ガイドとして熱意をもち、来館者のインスピレーションに応える、“ペトロザインブランド”が課題なのです。

スタッフの1日は、点呼、朝礼から始まります。ボランティアや見学者を含め、一線で活動するスタッフ全てが参加します。このとき、チームリーダーからその日の目標が発表されることもあります。朝礼の後、最初のトレーニングセッションが始まります。5分から10分の短いセッションですが、新しい知識を一つ増やす為の探求セッションとして位置付けています。その後、持ち場となる展示エリアへ移動します。(写真2)

スタッフは、その日に同じエリアでともに働くボランティアと展示について話しあうことも義務付けられています。ボランティアの多くは卒業を控えた学生や卒業したばかりの若者です。就職活動期間を利用して職場体験として、それぞれ異なる期間参加しています。ボランティアとして参加する若者は、必ずしも科学分野を学んでいる必要はなく、恒常的に知識や能力の開発に努めるツアーガイドとしてのやる気のみが重視されています。個々の展示についての知識を得ることから初め、段階を追って、展示そのものの見せ方やテキストやグラフィックの構成を学び、展示物そのものを掘り下げて理解していきます。



スタッフのトレーニング (写真2)

来館者に学ぶ

ペトロザインのアプローチは、展示を通じて来館者が身の回りに当たり前のようにあることを再発見し、またこうした体験を楽しめるようガイドすることです。体験型だけでなく、精神面でのアプローチも兼ねています。また、スタッフの来館者一人一人を覚える努力が、リピーターを増やすことに繋がっています。ペトロザインでは、以下のような観察調査を基本に、それぞれの来館者が館内で学んでいくスタート地点を設定します。私たちは、これを構成主義と読んでいます。年齢、性別、専門知識の有無、ワークシートを活用した校外学習か、または孫を二人連れのおばあさんでこどもの為に来たのか、それとも自分も楽しむために来館したのか、などが判断基準となります。(写真3)

スタッフは、来館者それぞれのリアクションを観



来館者へのパフォーマンス (写真3)

察し、来館者と体験を共有していきます。グループの中で、ある展示品に一番興味を持ったのはどのような人か、展示に関心を示していた時間は？展示に対して、どのようなリアクションがあったか？ガイドにはどのような補助を求めていたか？どのような質問があったか？などなど。

こうした情報が、展示構成を更に充実させるのに、非常に役に立っています。

パフォーマンスの構成要素

さらに、ツアーガイドには、サイエンスを題材にしたパフォーマンスをすることも求められています。ポケットから花崗岩のかげらや磁石、またはショップで販売しているエネルギーリングを使って、来館者とより近い距離で、個人または各グループがより親しみやすい題材を元にディスカッションできる環境を提供していきます。こうしたパフォーマンスや題材そのものが、来館者の関心や疑問を引き出し、そこからディスカッションが始まります。そして、来館者が自分でそうした小物を手にして扱ってみることで、それぞれが疑問を持ったり、自分なりの新しい発見をすることを期待しています。

スタッフは、自分のパフォーマンスに自信をつけると、5分ほどのミニショーでサイエンスデモンストレーションを行い、来館者にディスカッションを促していきます。そして、館内にある小テーブルやカートを使ったアクティビティに移ります。また最近館内に、複数のアクティビティができるディスカバリールームを設けました。

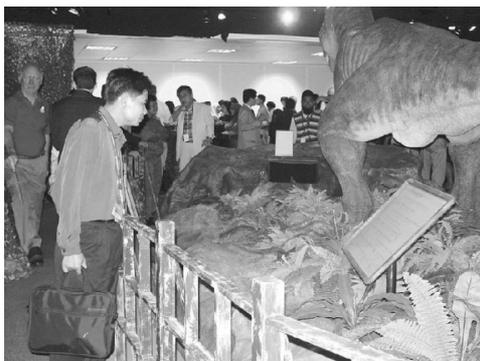
スタッフは、パフォーマンスやミニショー、アクティビティを積み重ね、その幅を広げていきます。10分から15分のサイエンスショーでは、コスチュームを着用しドラマ仕立てにして演出を加えています。これらの手法を構築していくにしたがい、相互のコミュニケーションを妨げる『見えない障壁』が徐々に無くなっていきました。時には音楽、時にはダンスを取り入れることもあります。そして、ASPACでは、実際のプラットフォームの様子を再現したライブパフォーマンスを取り入れたシアター方式で、臨場感溢れるショーを行うことができました。

最初のころは、あやつり人形を使ったショーを展開していました。最近、世界環境デーにあわせて、

川の体系や生活に必要な不可欠な水に関するジオラマ内に、科学者としてスタッフを配置しています。パフォーマンスは好評を得ており、外部機関によって行われたペトロザイン来館者へのアンケート調査で得られた600件を超える回答からも裏付けられています。アンケート調査では、マレーシア近郊の施設の中でも上位10%に数えられる“優れた施設”であるという結果が得られています。これは、以前あった下位89%という屈辱的な結果と比較すると飛躍的な向上ですが、この結果に甘んじることなく、更にパフォーマンスの向上に努めていきます。

2002年8月、初めてペトロザインの内部スタッフが企画構成した展示がオープンしました。約300m²の展示エリアには、日本から購入した恐竜ロボット4体を取り入れ、小さな子どものいる家族連れにも楽しめる、ユニークな展示を模索していました。(写真4) 展示には風刺要素も取り入れ、恐竜には羽根が生えていたのか？恐竜は泳げるのか？等の訪れた家族同士で話し合えるよう構成しました。この展示“Dino Trek”は、多くの来館者を魅了し、またこの施設を案内するガイドも、新しいフォーカスの側面や来館者の積極性を引き出し互いの交流を通じて楽しく学んでいくよう常に新しいガイド方式を考察し続けています。(写真5)

(翻訳：三田武志(株)ココロ)



Dino Trek (写真4)



Dino Trek (写真5)

21世紀におけるミュージアムショップの在り方について

日本ミュージアム・マネジメント学会
事務局幹事 松永 久

1. 現在の「ミュージアム」が置かれている状況

●もっと認識すべき公的ミュージアムを巡る環境

国立博物館の独立行政法人化が施行されて2年が過ぎた。この間、各国立博物館では、ミュージアムショップの運営見直しをはじめとした収益力の強化に対して積極的に取り組んでいる。

しかし、この間地方自治体が運営主体の博物館はどうかというと、国立の博物館の動向は気にしながらも、実際にはこれまでと変わらないところがほとんどはないだろうか。本来であれば、国立の博物館よりも事業の継続に対する危機感を持つべきだが、残念ながら博物館の現場では意外とそうした意識を持っているようには見受けられない。

それでは、近年の地方自治体を巡る環境は、国よりも良いのか、というところでは国同様に厳しいことは明らかである。地方自治体の年間予算を100とすると、そのうちの70は国や県からの補助金でまかなわれている。つまり、こうしたお金ははじめから使い道が決まっており、ミュージアムの支援に使うわけにはいかない。従って、地方自治体がいちばん自分で決めることができる30の中でミュージアムの支援を行わなければならない。しかし、この30の中には、福祉やライフライン（例えば、上下水道、道路）、ゴミ処理といった日常生活において欠くことができない（これを支出しないと、人が死んでしまう、あるいは日常生活に大きな支障を来す）ものも含まれている。そうしたお金を30から除いていくと、実際にミュージアムに割くことができるお金には自ずと限界が生じる。しかも、近年の経済環境の悪化により、地方自治体の税収は毎年その前年を下回っているところが多い。つまり、この30のうちの10が年々縮んでいるのである。地域住民が日常生活において欠くことができない事業のお金を削ることは自治体内の財政部局だけでなく、議会、さらには地域住民が認めるはずがなく、結果的に他の自主財源事業が削られることになる。

今、地方自治体のミュージアムが置かれている状況はおよそこのような状況である。そう考えると、各博物館はもっと自らの事業継続に対する危機感を持たなければならないのではないだろうか。これまでは、「教育普及」事業に関する予算は聖域とされてきたが、もはやその論理は通用しないほど地方自治体の財政事情は逼迫していることを厳しく認識すべきである。

●市町村合併で博物館はさらに厳しい環境に・・・

現在、全国の市町村の多くでは、2005年を目標年次に市町村合併に取り組んでいるところが多いが、これも博物館にとっては、逆風になりかねない。全国には大小3,000を超える博物館（博物館類似施設を含む）があるが、市町村が合併すると、旧市町村の博物館の事業経費も一本化される。そうなると、合併後の市町村の予算から見ると非常に突出した金額になることは避けられない。ほとんどの地方自治体の博物館では、仮に人件費を除いても光熱水費、さらには施設の維持管理費用だけで1,000万円単位の支出になっており、これが複数館ともなると、その総額は億に近づく単位となるはずである。これまでは、一館だけだったためにあまり目立たなかったものが、市町村合併の結果一自治体内に複数館となるとかなりのボリュームになると財政への影響を不安視する声は高まっていくことは避けられない。そうなると、いくら教育普及という設置目的があったとしても、地域住民からその存在意義や事業効果を厳しく問われても仕方がない。加えて、ここ数年は団塊の世代と呼ばれる人が退職を迎えることから、地方自治体は多額の退職給付を用意する必要がある（団塊の世代の雇用を確保するために、地方自治体の多くは他の世代よりも多く職員を採用しているところが多い）ため、博物館事業にまわすことができるお金はさらに厳しくなるため、博物館の危機感はさらに増すことになるだろう。

●民間企業が主体の博物館の状況はさらに厳しい

民間企業が主体となっている博物館の将来はもっと不安定である。民間企業が主体の博物館が運営を持続できるかどうかは、教育普及的な視点よりも、むしろ支援する母体である企業の経営体力に委ねられることから、地方自治体よりもさらに厳しい意思決定が突然下されることが多い。昨今では、野球、バレーボール、バスケットボール、アイスホッケー、ラグビーといったスポーツ系のクラブ活動を休止、廃部する企業が増えているが、今後の経済環境の動向によっては、休館あるいは閉鎖を検討しなければならない博物館が出てくる可能性もあるだろう。

実際、そういった予兆は既に起きており、当学会にも今後も事業を継続していくためにはどのようなリストラ（再建）をすべきか、といった相談が届け始めている。

2. なぜ、今ミュージアムショップなのか

●ミュージアムにおける「収入源」にはどのようなものがあるか

これまで述べたように、国内におけるミュージアムを巡る環境は、官民を問わず非常に厳しい。国立博物館では、ミュージアムショップに力を入れることをはじめとした増収戦略を展開しているが、今、その他の博物館がすべきことは、収入源となりそう

な事業として何が考えられるのかを整理し、その中で自分たちは何ができるかということを考えるべきである。

このため、ミュージアムにおいて「収入源」となりそうな事業を、海外の事例（後述参照）も踏まえ次の8つに分類した。この中で、「巡回展」は、最近少し見られるようになってきたが、まだ博物館にとって「収入源」といえる状況にはなっていない。また、企業からの寄付は、初期投資時は多々あるが、オープン後となると稀である。

表1 国内のミュージアムにおける「収入源」の可能性

収入源	主な収入項目
入館料	入館料
ミュージアムショップ	物販収入（通販、ネット販売を含む） *テナント料だけ受け取るパターンもあり
喫茶・レストラン	飲食収入 *テナント料だけ受け取るパターンもあり
研究費	科研費、行政や民間からの調査受託など
広告宣伝料	特に制約条件がないスポンサー料と一業種一社を原則としたスポンサー料(オフィシャルスポンサー料)の2通り
個人からの寄付	寄付金の場合と物の寄付の2通り
企業からの寄付	寄付金の場合と物の寄付の2通り
巡回展の制作	巡回展貸し出し収入
ワークショップの収入	原材料費+人件費+利益を見込んだ「参加費」

注：二重線以下は、国内の博物館ではほとんど見られない。

●なぜ、ミュージアムショップに最も注力する必要があるのか

表1で示した「収入源」を改めて見てもらいたい。この中で、入館料については、仮に値上げできたとしてもせいぜい100~200円であり、値上げに見合うだけの展示内容等の充実が図られない場合は、入館者数の減少に直結することは避けられない。実際に地方自治体や民間企業が置かれている環境を考えると、「追加投資」といえるだけの展示内容の充実が実現することは稀であることから、入館料の値上げは、「追加投資」に目安がついた段階で実施するというのが現実的である。従って、収入増にはなかなか貢献できない。

また、喫茶・レストランについては、本来はミュージアムの「収入源」として多大に貢献することが期待できるのだが、それを実現するためには、調理に関して高度なノウハウの蓄積と多額の投資を要するうえ、テナント事業者を入居させて運営した場合、入居企業と利益を折半することになり、ミュージアムにとってうまみがある事業にはなかなかないのが現実である。

さらに、研究費については、毎年確実に獲得できるという保証がないうえ、現在の研究費の性格も、来館者の増加、満足度の向上を目的としたコンテンツ開発に向けられているというよりはむしろ学芸員の学問的な研究の色彩が強いケースが多い。従って、

ミュージアムの持続的な運営に対する支援に結びつかせることは難しい。

このほか、ワークショップの収入も、国内の博物館は実費程度しか受け取ることができず、個人の寄付もアメリカのミュージアムのように長年ミュージアムボランティアで勤め上げ、博物館に愛着をもった人が出るまでは実現しにくい。また、企業からの寄付も、昨今の経済状況下では継続的に期待することは難しい。広告宣伝料としてであれば、まだ支出をする企業も社内の説得をして継続性を持たせることができるが、その場合の条件は、広告に見合った効果(広告したことにより企業イメージが上昇した、商品の認知度が高まった等)が常に“測定”できることが必須である。しかし、現在の国内のミュージアムにおいて、そこまでしっかりとした対応ができる場所は、残念ながら極めて少ないのではないだろうか。

そうすると、博物館にとって、当面の収入増に期待を持つことができるのは、国内のほとんどの博物館で所有(委託の場合ももちろんあるが)し、客単価を上げることで館の収益に貢献することができる「ミュージアムショップ」のてこ入れに注力することが最も現実的であると思われる。

●ミュージアムショップが本当に注目されるべき理由

博物館における収入増に貢献する事業として「ミュージアムショップ」が最も有望であると導く手法は、一見すると消去法の結果のように見えるかも知れないが、私は、博物館におけるミュージアムショップは、もっと「積極的な」理由から、これまでよりも力を入れるべきであると考えている。

①ミュージアムショップは、来館者の満足度を決定づけることができるから

- ・ミュージアムショップは、通常は館内の展示を見た後、最後に立ち寄る場所である。従って、ミュージアムショップの充実度は、来館者の最終的な満足度を定める上で非常に重要な要素として機能する。
- ・ここで、自らが希望する、満足できるものが手に入れば、館内の展示が多少満足のいくものでなくとも、再び訪れてみようと言う気を起こすものであり、それまでの館に対するマイナスイメージを払拭することができる。また、再び訪れることがないとしても、通信販売やネット販売などの顧客となってもらえることができる。
- ・また、ミュージアムショップで気の利いたものをおみやげとして、あるいは自らが使うものとして持ち帰ることができれば、自分以外の人に対して、博物館の良いイメージを伝えたいくなるものである。こうした「言葉の波及

効果」は、広告宣伝費を多額にかけるよりはるかに効果がある。

②博物館に来ることができない人の購入も期待できるから

- ・ミュージアムショップの良いところは、来館できない人もターゲットとした展開が可能であるというところにある。例えば、飛行機の機内販売やネット販売、通信販売など来訪できない人の購入も期待できる（既に、こうした展開を始めているところもある）。
- ・また、自ら開発した商品であれば、館内だけでなく他の場所での販売も可能である。

③テーマ性を活かした商品化の余地が我が国の博物館にはまだ十分あるから

- ・国内にあるミュージアムショップの商品構成を見ると、館のテーマ、あるいはテーマに基づいたワークショップでの体験グッズ等が非常に少なく、どこの館にでもあるような商品が多数並んでおりバリエーションに乏しい。
- ・しかし、テーマ性を活かした商品構成、さらには価格帯の工夫をすることで、売り上げの向上を図る余地は十分ある。今は、「売れる」商品づくりに対する意識と努力が足りないだけである。

④学芸員にとって新たなインセンティブとなりうるから

- ・学芸員は、館の予算と、国や民間企業等の研究補助費が主たる研究活動に使うことができるお金であるが、仮に自らのワークショップで使用した道具をグッズ化する、あるいは自らの著作物（コンテンツ）を置く等により、新たな研究資金を自らの手で得ることができる。
- ・また、学芸員と来館者のコミュニケーション手段としてミュージアムショップを活用するという展開も可能になる。こうしたメリットは、学芸員にとって新たなインセンティブとなりうるものである。

3. 海外におけるミュージアムショップの動向

ところで、海外におけるミュージアムショップはどうだろうか。もちろん、海外のミュージアムでも日本のミュージアムショップと同じように、魅力に乏しい商品構成のところも多い。しかし、国を代表するような都市のミュージアムのショップとなると少し展開が異なっている。

例えば、アメリカ・ワシントンD.C.のスミソニアン博物館群のミュージアムショップの展開は館内にとどまらない。ワシントンD.C.とアメリカ国内の主要都市を結ぶロナルド・レーガン空港（旧ナショナル空港）の中に大規模なミュージアムショップを構え、スミソニアンの各博物館のグッズが販売されている。

実は、スミソニアン博物館群が収益事業にこだわるには訳がある。近年、アメリカ政府も財政事情が厳しく、ここ10年で国の支援が大幅にカットされた。このため、これまでの体制を維持していくためには、自主事業で稼いでいくしか手だてがなくなったのである。最近では、スミソニアン博物館群を構成している各館はそれぞれ自分で稼ぐ手だてを持つよう、スミソニアンインスティテュート（スミソニアン博物館群全体の運営を統轄する組織）から求められており、各館ではショップ事業だけでなく各館の保管資料（各館の展示品はスミソニアン博物館群のコレクションのわずか1%に過ぎず、99%は来館者の目に触れることなく保管されている）を貸し出し「スミソニアン展」という名前を付けて企画展ができるよう制度を改めたり、海外の財団における博物館建設に必要な資金の調達支援を目的とした巡回展のプロデュースを行うなど、収益事業に積極的な取り組みを見せている。

また、アメリカ・シカゴ市の子どもの博物館は、ネイビー・ピアという大規模ショッピングモールの1階のメイン動線上に書籍・雑貨等から構成されるミュージアムショップを構え、ミュージアムの来館者以外の取り込みを図っている。その結果、ミュージアムと併せた収入は、子どもの博物館のランニングコストをほぼまかなうことができる水準に達している。

一方、ヨーロッパに目を向けると、まずイギリスの大英博物館では日本語で書かれたオンラインショッピングのサイトを開設し、カレンダー、トートバッグ、キャンドルなど（1商品当たりの平均価格は3,000円程度）を販売している。また、フランスのルーブル美術館では、「美術館のブティック」という洒落た名前を付けて、英語とフランス語でオンラインショッピングを楽しむことができるサイトを開設している（日本語についても開設する予定があるようだが、まだ実現はしていない）。海外は、日本と違いクレジットカードが発達しており、オンラインショップでの決済が容易にできるため、オンラインショッピングが盛んである。

4. むすびに代えて

本稿は、博物館における最近の動向を踏まえるとともに、21世紀の博物館における「ミュージアムショップ」の重要性・存在意義を中心に議論を進めてきたが、最後に、改めて21世紀のミュージアムショップに期待することを書いてみることにしたい。

これまで述べたように、21世紀のミュージアムショップは、我が国の博物館における「収入源」として最も重要な事業である。館のテーマに沿ったグッズ、ワークショップ等の教育普及活動で用いる教育ツールのグッズ化をはじめ、館のオリジナリティを感じる商品の開発に力を入れるべきである。そして、販売は館内にとどまらず、商品ニーズが高いものに

については、市場ニーズを把握した上で、インターネットをはじめとした販売チャネルを用いて積極的に売り込んでいくことを志向すべきである。

ただし、ここで一つ留意すべきことが一つある。それは、ミュージアムショップの対面販売の場にあつては、顧客満足を常に意識した接客接遇に心がけなければならない、ということである。言葉遣い、身のこなしだけでなく、ラッピング（ギフト需要への対応）、ライティング（領収証など文字の書き方）に至るまでである。一方、ネット販売や通信販売にあつては、商品のイメージがわかる映像（ビジュアル）と商品説明の丁寧さを大切にするとともに、対面販売できない部分を補うサービス（例えば、ネットだけのオリジナル商品の発売、ネットで購入する商品の特別割引等）を提供することに心がけることが必要である。

各館にあつては、ミュージアムショップにおけるグッズに魅力があることが、館の展示物の魅力とともにプロモーション活動を順調に進める上で非常に有効な要因であり、しかも貴重な収入源であるということを理解して頂くとともに、今後のミュージアムショップづくりに邁進されることを願ってやまない。

〈追記〉

最後に私事で恐縮だが、本年5月18日～22日にかけて、アメリカ・オレゴン州ポートランドでAAM（全米博物館協会）の総会とミュージアムエキスポが開催され、私も出席したが、今年は韓国から、韓国博物館学会会長をはじめ多くの人に参加し、熱心にアメリカ流のミュージアムショップのノウハウを学んでいた。韓国では、2005年に開館する国立博物館に対する準備もあつて、特に力が入っていた。同じことをすることに対する是非はあると思うが、少しでも魅力的なミュージアムショップづくりに向け、情報収集を行っていた彼らの積極的な姿勢は是非とも学ぶべきであると痛感した。



ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

産業再生機構に委ねられた「阿蘇火山博物館」の行方

JMMA 事務局長

高橋 信裕

「阿蘇火山博物館」を襲った危機

熊本県の「阿蘇火山博物館」が閉館の危機に晒されている。設置・運営母体の“九州産業交通”（本社：熊本市）が経営破綻に陥り、政府の肝いりで平成15年（2003）5月に設立されたばかりの「(株)産業再生機構」の支援のもとでその再生が図られることになった。これまでバス事業以外にも経営参入していたホテルやタクシー、フェリー事業の多角的事業の再編やそれら資産の売却、子会社法人の清算等による負債の圧縮が余儀なくされているのである。その合理化の対象に昭和57年（1982）の開館以来、20年余にわたって阿蘇の観光の目玉施設として、また火山活動の研究及び教育施設として、さらには噴火や地震予知などの防災行政面で地域社会に重要な役割を果たしてきた「阿蘇火山博物館」が、消え去ろうとしているのである。

そもそも、「阿蘇火山博物館」は、昭和54年（1979）の9月6日に中岳が大爆発し、観光客3名が死亡、11人が負傷するといった不幸な出来事がきっかけとなって、設置されたものである。すなわち、安全対策が行政上の課題となり、「阿蘇火山防災会議協議会」と「熊本県」が作成した安全対策にそって、民間企業である“九州産業交通”が建設したものである。中岳の火口壁には2台の「火口カメラ」が設置されており、火口の状況は、開館以来、24時間、20

年余にわたって常時、博物館による遠隔操作で監視するシステムが備わっている。そして、これらの映像やデータは、気象庁や警察、消防、マスコミにも提供され、防災上、計り知れない貢献をもたらし、研究実績も積み重ねてきている。

近年では、教育分野にも力を入れ、九州地区で先端的な事業展開を試みていることでも知られていた。例えば、文部科学省の「科学系博物館ネットワーク推進事業」における実践は、電話回線を利用した遠隔授業の可能性を全国の小中学校と連携して実証したもので、ライブな画像、音声のやり取りによるインタラクティブな学習手法がマスコミの話題をさらった。そこには新規の「学習プログラム」とともに「教材」の開発も同時に試みられており、阿蘇火山の岩石や標本類がキット化されて連携先の学校へ送られ、通信による現場（火山）情報の交流と実物による学習とが融合した、IT社会ならではの博物館の新たな学習形態を提示したものとなった。

地元の熊本大学との協力態勢も緊密に図られてきており、大学における阿蘇の研究成果や専門的な知見を博物館事業に積極的に取り入れ、観光と学術とが両立する配慮も行ってきた。当博物館の存亡の危機に際して、いち早く存続すべきとの要望を行政や社会にアピールしたのも、こうした関係にある熊本大学の研究者達であった。事実、この9月12日（金）日本火山学会（平林順一会長）と熊本地学会（会長・渡辺一徳熊本大教授）が、存続に関する要望書を県と九州産交とに提出している。

JMMAとしても、こうした窮状の打開に一石を投じるために、池辺館長に同行する形で、事務局を代表して私と原幹事が10月10日（金）、丸の内の産業再生機構に出向き、担当の執行役員に「阿蘇火山博物館」の存続を強く訴えかけた。



博物館外観



博物館展示室

博物館の危機に、手をこまねくばかりの行政当局

「阿蘇火山博物館」の社会性とその存在意義には充分なものがあり、今後の存続の受け皿としてもっとも適切な機関とはいえば、それは行政ということになる。ところが、地元の阿蘇町にしても、また熊本県にしても、その受け入れを拒んでいるのである。理由は、町にしてみれば、近隣の町村との合併が当面の課題として論議されており、現時点で一町のみ意向での新たな資産取得は慎むべきであるとして、難色を示している。一方県の場合、現在独自の県立博物館計画が立てられており、財政難から建設が凍結されている現状での受け入れは、分館と言う位置付けであったとしても適切ではない。地方自治法に「行政財産の賃貸はできない」とあることから同財産の管理委託は現時点で県の力では不可能との見解である。現状では博物館を「お荷物」としてしか見えない行政の考え方が浮き彫りとなっている。県立博物館の目玉は、自然史系で、その計画においても「阿蘇山」が最も特色あるテーマとして取り上げられているにもかかわらず、である。

生涯学習社会を実りあるものにするために、国や自治体を挙げて「学び」の環境を整備すべきとの観点から、平成13年12月に「文化芸術振興法」が制定された。

そこには、「文化芸術が人々に多くの恵沢をもたらすことに鑑み、活力ある社会と心豊かな国民生活の実現を目的として、文化芸術の振興についての基本理念や国や地方公共団体の責務など、文化芸術の振興に関して基本となる事項」が定められている。

こうした法律の文面だけを追うならば、「阿蘇火山博物館」の今後は、行政が引き継ぐことがもっとも望ましいのである。遺憾ながら、博物館のことになると行政は「遵法精神」(特に博物館法に対して。例えば、入場料無料の原則の無視や所管を教育委員会に定めた条項に対して、近年では教育委員会所管でない公立博物館が目立っている)にもとることが慣わしのようにになっている。

我々の手で「阿蘇火山博物館」を救おう！

行政がダメなら、そこは市民が、あるいは地域が救わなくてはならない。博物館の存在と役割は、その地域の市民社会が健全に機能しているかどうかが問われる問題でもあるからである。

「阿蘇火山博物館」のこれまでの地道で活発な活動は、地域に多くの支援者を育ててきている。その中心的な存在は、JMMAの学会賞(平成14年度)を受賞した池辺伸一郎館長である。

現在、池辺館長は九州産業交通と産業再生機構との間に立って、「阿蘇火山博物館」の存続の可能性をあらゆる方向から検討し、検証している。

池辺館長の試算によれば、現在、年間平均入館者数は13万人(最盛時には30万人)、この入館料収入とレストランやミュージアムショップでの売上げ利益で、収支はトントン(減価償却費は除く)で収まっているとのこと。企業会計ベースでの収益性は低いものの、博物館としての公益性を重視し、税制上での優遇措置が受け入れられるならば、なんとか凌いでいける状況であるという。それだけに、単なる商業施設に転売、身売りすることは無念この上ないということである。

一方、「阿蘇火山博物館」の命運を握っている(株)産業再生機構は、九州産業交通が取引銀行に求める債権放棄の見返りに、経済的合理性を最優先に打ち出すことで、銀行サイドの理解と金銭的損失を最小限に抑えることを目指している。したがって、博物館は有償での引き取り先が理想とされている。

ただ、そこには4つの条件がつけられている。

すなわち、

- (1) これまで火山博物館の担ってきた機能と役割の維持
- (2) これまでの従業員(16名)の雇用の保証、あるいは退職金相当の資金の確保
- (3) 博物館が担保物権になっており、担保権者への支払い資金の確保
- (4) 火山博物館は簿価で約9.5億円の資産価値が見込まれ、譲渡に対して適正な価格の設定



シンポジウム



フィールド学習

である。産業再生機構としては、これまでの火山博物館の実績や地元への貢献度を考慮して、(1)の条件を最優先にしたいとの意向である。

(1)の条件以外は、すべて金銭に絡むものばかりである。もし、(1)が最優先され、有償譲渡が極力低価格で抑えられたにしても、開館後20年を経た現状では、所期の目的を果たすことは覚束ない。大規模な改装が不可欠である。多額の購入費と改装費が、この時期に民間から投入されることは、考えにくい。有償譲渡にかかる費用は最小限にとどめ、博物館の機能、役割を発揮するための投資に予算を充てることが妥当な線であろう。

これらの諸条件や諸事情を勘案すると、おのずと次の結論が導き出される。

- (A) 多少の財力や基金、組織力等をもつ非営利法人（火山学会やNPO法人など）的性格の強い組織、団体で、既存の博物館の職員が雇用でき、博物館の事業運営も可能で、かつ施設のリニューアルに応分の資金が投入できる法人

産業再生機構では今後、譲渡を名乗り出た法人や団体等に提案書の提出や価格設定をさせ、入札あるいはプロポーザル方式で引き受け先を決定したいと言う。その場合、価格よりも提案を重視するということである。現在既に2～3件の引き合いがあり、JMMAにもそうしたスポンサーの推薦依頼があった。我々は、日本科学技術振興財団等に相談することなどを申し合わせた。

今後は、この1ヶ月を目途に買い受け先のリストアップをし、応募各社に提案依頼を行い、提案や価格等を審査し、11月末までには受け入れ先を決定したいとのことである。

場合によっては、博物館は全く消滅してしまうかもしれない。消滅するとなると、世界的な火山である阿蘇を研究し、紹介する博物館がなくなると言う事である。この損失は大きい。いずれ、県立博物館が整備され、阿蘇をテーマにした展示や施設が公開されることになると思われるが、その時、失われたこの立地環境と施設に対して、大きな悔いを再度味わうことは必至である。

ことは緊急を要する。こうした状況を打開する方策として実質的な受け皿をこの段階で準備すべきではなかろうか。ただ、手をこまねいて理想的なスポンサーをひたすら待つという姿勢では、未来は開けない。この思いは、一番の当事者である池辺館長が最も切実に感じている問題であることから、池辺館長自身に思いの丈を訊ねてみた。池辺館長が描く受け皿はNPO法人である。個人や団体、法人による会費や寄付金に加え、国や自治体からの補助金や助成金で経営基盤の財務強化をはかり、阿蘇全体を「エコツーリズムゾーン」として捉えることで、自然体験ツアーといったツーリズム感覚を盛り込んだ、新たな阿蘇観光ルートを開発し、その中核施設として宿泊・研修機能を併設した「阿蘇火山博物館」を位置付け、地域とともに阿蘇という世界的な資源を共有、発展させ、同時に行政の関心の高い火山防災にも対応できる博物館構想が描かれている。

ミュージアムマネジメントに関心をもつ我々は、少なくとも今まさに存亡の危機にある「阿蘇火山博物館」を支援し、存続に向けての大きな力となるべきではなかろうか。



遠隔授業風景

第3回全国企業ミュージアムグッズ 人気コンテスト 入選作決る！

NPO法人 企業ミュージアムの協会
亀田 訓生

特定非営利活動法人「企業ミュージアムの協会」(理事長亀田訓生)が'01、'02年公募をいたし、全国的に大きな話題を呼びました。“企業ミュージアムの「ミュージアムグッズ人気コンテストBEST10」”本年第3回が決定いたしましたので、お知らせいたします。

これは、高齢・少子化時代を迎え、心の豊かさ・健康・環境など高まる人々の知的好奇心を満たす社会文化・教育施設としての、博物館、記念館、美術館、科学館、子ども館など所謂各地の「企業ミュージアム」のグッズコーナーで販売されている「ミュージアムグッズ」のすぐれたものを10点選定しようとする企画です。

そして、そのすぐれたミュージアムグッズは、企業ミュージアムの魅力を倍加させ、見学者を魅了し、館のリピーターを増やすこととなります。またユニークなグッズは、ミュージアムのアイデンティティを際立たすことにつながるとともに館の経営にも大きく貢献します。その活用を通して、当協会の目的とする『子どもの健全育成(総合学習)、社会教育(生涯学習・趣味の多様化)の推進、文化の振興(地域の交流と活性と文化おこし)』を着実に実践することが出来ると考え、年初(2003年1月8日—2003年5月7日)から公募していたものです。

応募点数 81点

入選点数 11点(ベスト賞10賞10点、奨励賞1点)

表彰式

日時：2003年8月1日(金)12時00分～15時30分

場所：大阪 千里中央 千里ライフサイエンスセンタービル20階千里クラブ会議室にて開催いたしました。

1. 企業ミュージアムグッズ人気コンテスト入選一覧 BEST10賞 賞状・賞牌と賞金各1万円

(1)紙の博物館 「紙すきくん」1,800円

財団法人紙の博物館(東京都北区王子1-1-3)「手作りハガキ制作キット」(意匠登録済)。製紙会社などが協力して1998年に北区飛鳥山公園内に新築された53年の歴史をもつ紙の博物館が生んだヒット作。どこの家庭にもありふれた材料〈牛乳パックからハガキをつくる〉ことがみごとにできる。キットには、パルプ液のつくり方と紙のすき方の図解入り説明書がついている。押し葉やすかし模様を入れたハガキも作れる上、しおりもつくることができる。価格も良心的。

(2)くすりの道修町資料館 「福虎」1,500円

道修町文書保存会(大阪市中央区道修町2-1-8)「神虎」ともいう。大阪の郷土玩具にもなっている張子である。くすりの道修町資料館と表裏一体の関係にある少彦名神社独自の御守。家内安全無病息災の御神徳を授かる。同型の小ぶりな「豆神虎」700円もある。毎年11月22、23日の同敷地内になる少彦名神社の祭り“神農さん”では、やや大きな神虎がお札類と一緒に笹につけられ販売され名物となっている。

(3)恵比寿麦酒記念館「特製エビスビヤグラス320ml
2個セット」1,000円(外税)

サッポロビール株式会社(東京都渋谷区恵比寿4-20-1)

「エビスペアピルスナー」と名付ける。冷やしたビールをこのグラスに注ぐと恵比寿さま像がガラス面に浮かびあがるという楽しい仕掛けがある上に、同時に鯛が1匹抱えられているのが真っ赤に浮かびあがる。佐々木硝子と共同開発した。ペアのうち1つは、赤い鯛を両脇にかかえたラッキーエビス柄である。エビスビールは、瓶ビールの黄金期に10本に1本程度の割合で、2匹鯛の図柄のラベルを1匹鯛の恵比寿ラベルに混ぜて瓶ビールを大ヒットさせたことがある。

(4)グンゼ博物苑「Tシャツ(繭マスコット)」800円
グンゼ株式会社(京都府綾部市青野町膳所1)

ミュージアムグッズでは、Tシャツは、ポピュラーな定番商品にあげられている。しかしその大半は、既成の生地のTシャツに館名を入れたり、デザイン等をあしらったものである。このマスコット繭(まゆ)を袖に黄色でプリントし英字で小さく館名をいれたシンプルなTシャツは、長年の肌着技術の自社製品(TOPFAIR)で肌さわりが良いと評判である。

(5)アサヒビール大山崎山荘美術館「モネ睡蓮ブックカバー」850円

アサヒビール株式会社(京都府乙訓郡大山崎町大山崎銭原5-3)

宇治川、桂川、木津川三川の合流を望む天王山山腹の緑に溶け込むように立つ加賀正太郎氏の設計の名建築美術館本館。その前に建てられている安藤忠雄氏の設計の新館には、有名なモネの睡蓮収蔵5枚中少なくとも3枚の絵が常時展示されている。そのモネの睡蓮をデザインしたブックカバーを今春から発売した。女性に人気がある。

(6)自転車博物館サイクルセンター「手作りだるま車セット」400円

シマノ・サイクル開発センター(大阪府堺市大仙中町165-6)

館には世界初の自転車から、最新のオリンピック出場車まで、50台のクラシック自転車が並ぶ。針金自転車の置物は、今までグッズとして販売していた。昨今自分でつくってみたいという声が多く寄せられるようになってきたので完成品と針金をセットにしてみた。親子で力をあわせておもちゃをつくり親子で遊べる「手作りおもちゃ教室」に参加できない人にも好評。

(7)神戸らんぷミュージアム「マッチラベルシール (A、B) 各170円

関西電力株式会社 (兵庫県神戸市中央区京町80番クリエイト神戸2~3階)

マッチは、明治から昭和の中頃まで暮らしに無くてはならないもので、戦前まで多くのマッチが神戸で製造されていた。居留地の貿易商により、神戸港から輸出される花形産業でもありました。7万種類の当館が誇る収蔵マッチの中から選び出して2種類 (A、B) A4の大きさの用紙にシールを作成し、1枚に約30のマッチシールを収蔵記載している。

(8)中富記念くすり博物館「紙風船」100円

久光製薬株式会社 (佐賀県鳥栖市神辺町288-1)

赤色、青色、緑色の8センチ角の風船がセットにされ、館名入りの白い紙袋に入っている。「田代のくすり屋さんは各地の家々を訪れてくすりを預け次に行ったときに使った分の代金を受け取りました。毎年訪れるので「田代の医者」と呼ばれ頼りにされました。おみやげにもらう紙風船は子供達にたいへん喜ばれました。」という館長のメッセージや、「万金膏」などの昔の広告が紙風船6面各面に印刷されて楽しい。

(9)飛騨高山美術館「ロンドンバスミニカー」600円 (外税)

株式会社紀文 (岐阜県高山市上岡本町1-124-1)

文化と伝統工芸のまち高山市の高台にガラス工芸と世紀末芸術の美術館を地元の総合商社紀文が6年前開設。この館ではロンドンバスを購入して、JR高山駅から誘客のために美術館の間約3kmの間、国道を通り観光名所をめぐりながら30分かけるシャトル自主運行を2年前からはじめた。現在1日4往復運行。その赤い2階建てバスのミニカーをミュージアムグッズにして昨年夏発売した。

(10)久慈琥珀博物館「エンブレム入り久慈琥珀香」各350円 (外税)

久慈琥珀株式会社 (岩手県久慈市小久慈町19-156-133)

岩手県久慈地方は、国内唯一の琥珀産出地である。その太古8500年以上昔 (恐竜時代) の樹脂の化石は、世界的にもその希少性をみとめられて

いる。その琥珀を原料にしてつくられたお香は安らぎを感じさせる高価な品とされ、古くから珍重されてきた。当協会主催の第1回企業ミュージアムグッズコンテストBEST10入賞のレ・グラジエ (香台付き化粧箱入り3品種1500円) を買いやすい形にした。“当協会全国ミュージアムグッズベスト10受賞”というエンブレム入りにし、15本のお香のおしゃれなミニパックにして登場させた。〈アンバー〉(黄) みずみずしく上品な香り、〈アンバーローズ〉(赤) 安らぎを感じるエレガントな香り、〈アンバーウッド〉(緑) 親しみやすいフレッシュな香りの3種がある。

2. 奨励賞 賞状・賞碑

1. 白鷹緑水苑「緑水苑オリジナル前掛け」1,000円 (外税)

白鷹株式会社 (兵庫県西宮市浜町1-1)

かつて造り酒屋で作業着として身につけていた前掛けを「現代風におしゃれにアレンジしているところが秀逸」丈夫な綿とスフの混紡縫り糸を使い、一つ一つ手で染めた手作り感満点の前掛け。前面に大きなポケットが2つある機能性もよい。わが国の「和」の伝統が見直される中、パンツやスパッツの上につけても素敵なファッションとなる。自社ブランドもデザインに入れ込んでいる。



写真1 入選の工夫された魅力グッズBEST10賞10点と奨励1点

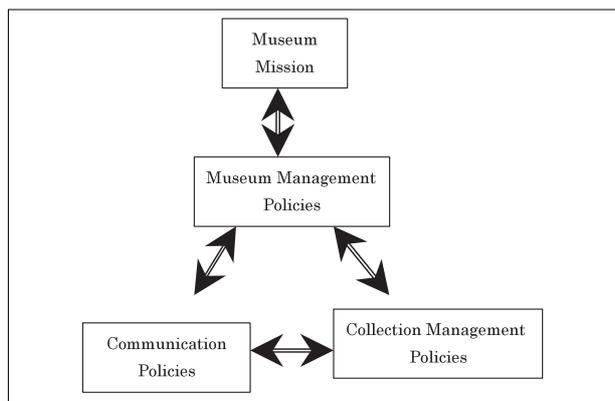
研究部会活動報告
理論構築研究部会
第1回研究会
実施報告

テーマ：美術館・博物館における調査・研究のマネジメント
日 時：平成15年7月5日（土）
場 所：科学技術館
報告者：高安 礼士（理論構築研究部会長）
参加者：17名

1. はじめに

近年、設置者の立場からの運営改善ばかりでなく、利用者の視点から博物館運営を見直し、マーケティング等の経営学の考えを導入した科学的マネジメントが実践されています。ミュージアム・マネジメント学会においても、これらのマネジメント理論の学術的基礎を構築することが望まれています。また、日本博物館協会においても博物館運営の新たな拠り所として「博物館の望ましい姿—市民とともに創る新時代の博物館—」が作成され、博物館の運営構造として「ミッション」「コミュニケーション」「コレクション」機能（及びその指針）が提案されています。

今回は、コレクション・マネジメントの基礎を成す「調査・研究活動」に焦点を当て、学校博物館の設置、技術史研究の手法、科学研究補助費を利用した研究等のマネジメントに関する研究会を実施いたしました。



2. 開催日時・場所・参加人数

- (1)平成15年7月5日（土）13：30～17：50
- (2)科学技術館6階 第三会議室
- (3)参加者 17名

3. テーマと発表の概要

開催テーマ：「美術館・博物館における調査・研究のマネジメント」

- (1)調査・研究のマネジメント—科学技術史研究の手法—

東京農工大学 高橋 雄造 教授
電気技術史研究を行う中で得た様々な技術や手法について、スミソニアンやドイツ博物館での研究滞在経験に基づく事例紹介があった。電気技術史も歴

史学の一つであり、歴史学者との協力が欠かせない。科学技術史研究は、開発当時の価値と現在から見た価値を評価する方法がある。技術史研究は、基本的には開発された当時の価値を調べるものでなければならない。そのためにも、技術史研究は、物件資料と記録された史料等に基づく実証的な歴史研究でなければならない。博物館・アーカイブズ・ライブラリーの必要性がそこにあり、とりわけ実物資料の保存を行う博物館の役割が大きい。

また、現在に残っている技術ばかりに注目が行きがちであるが、一見滅んだように見える技術に関する研究も大切である。時代がどのように変化するか分からないからである。古い技術と思われたものが現代に再び生き返ったファクシミリの技術の歴史などは、そのことを如実に示している。

発表後の質問として、「民俗史の技術は伝承が難しいが、電気技術の場合は技術を再現するにはどのような方法があるか。」「米国においては、電気技術史研究は評価されているのか。」等の質問があった。それぞれについて、「技術の継承や再現は、実物資料と文献史料を持つ博物館の学芸員の仕事であり、頑張ってもらいたい。」「アメリカでも、エジソン以外の人物はすぐにはあがらない。他の分野ほどの評価はなかなか得られていない。」との説明があった。

配布資料

高橋雄造、「電気技術者は技術史論文をどう書くか—電気学会誌と技術史論文—」電気学会、1995

高橋雄造、「電気技術史研究の動向」電学論A118 巻7/8号、電気学会、1998

- (2)学習意欲を高める理科学習—学校ミニ・ミュージアムをとおして—

千葉県飯岡町立飯岡中学校 山本 光二 教諭
平成14年度に千葉県の長期研修制度に採用されて行った調査研究に基づく報告であり、今回はミニ博物館の構築とその活用についての発表が行われた。平成13年度までの勤務中学である銚子市立第一中学校において実施した「中学3年生理科第1分野」の「科学技術と人間」の単元を展開するために、ミニ科学館を学校の空き教室に作り、授業の導入や学習の動機付けとして利用した実践報告であった。

千葉県内で使用している教科書の調査から、教科書における「囲み記事」や「口絵」の内容分析を行い、新しい教育課程で使用する教科書では「原理・



写真1 発表会場の様子

法則」の説明件数が減り、「科学技術の応用・有用性」の説明件数が増えていることが報告された。

実際の授業では、導入にミニ科学館見学を行った。また、学習の動機付けのためにインターネットを利用した授業の実践事例が説明された。この授業の最後に「発電所を銚子に作るとしたらどのような方式がよいか。」と言う課題を生徒に与え、各自に考えさせた。風力発電や太陽光発電などの自然エネルギーを利用した発電方式に人気が集まったが、「銚子でも水力発電がよい。」と言う生徒がいて「落差を利用する」ことを知らないと見られる生徒もいた、との説明があった。

会場からは、「長期研修制度とはどのようなものか。」「実際の授業での生徒の反応はどうであったか。」「このような学校博物館はどこでも作っているのか。」「今回は科学系の博物館の事例だが、歴史博物館も学校に作れるか。」「このミニ博物館で利用した展示物は小型で扱いやすいものばかりなので、その後授業の中でも実験などに利用できそうだが、利用はしたか。」等の質問があった。

「ミニ科学館へ行ったことのある生徒が多かった。」「自分と人間関係のある生徒は疑問点を聞きに来た。」「授業後の変容については、その後転勤したのではっきりは分からない。」等の講師からの回答と「千葉県では毎年60人ほどの長期研修生が、大学や企業、教育センター等で研修や研究を行い、人材育成に努めている。」等の補足説明があった。

配布資料

山本光二、学習意欲を高める理科学習の在り方、千葉県総合教育センター、2003年

(3)調査・研究のマネージメント—科学研究費を用いた調査・研究の運営—

東洋大学国際地域学部 長濱 元 学部長
科学研究費補助金は、平成13年度から「科学研究費振興会」に一部が委嘱されたが、平成9年から13年度までの実務に基づく説明がなされた。研究補助金を申請できる資格やその応募方法、申請計画の作り

方、その際の分野の決定などについて具体的に、かつ総括的な全体像の説明があった。

科学研究費補助金の研究種目は、大きく「特定領域研究」「基盤研究(S)・(A)・(B)・(C)」「萌芽研究」「若手研究」と分類され、研究期間や金額によって応募する種目が異なる。また、科研費を申請するには「研究代表者」「研究分担者」「研究協力者」を定めるほか、研究代表者となる者の属する研究機関を定めている。

実際に申請するにはいくつかの要件があり、また採択されるためにはそれまでの研究実績も必要である。そのためには、時宜を得た研究テーマと適切な研究代表者と研究分担者が望まれる。また、実際に研究を実施し、それなりの報告書をまとめなければならぬので、研究協力者等を含めた研究のネットワークが大切となる。

平成13年度から基盤研究(A)以上の研究には、間接経費20%が認められるようになり、研究受託機関にもメリットが生ずることがあるようになった。

発表の後、質問・意見・感想として「博物館では科研費になかなか申請できにくい状況がよく分かった。」「博物館職員は、研究協力者で頑張ればいいのが分かった。」「民間の株式会社でも、受託機関になれるか。」などがあり、「県立の博物館でも申請できるところが出てきた。」「基本的に民間企業は申請できにくい状況であるが、改善されるであろう。」等の応答があった。

配布資料

日本学術振興会科学研究費(基盤研究等)取扱要項(平成11年6月9日規定第6号)

平成15年度科学研究補助金(科学研究費、研究成果公開促進費)公募要項、文科省

長濱元、「JMMA平成15年度第1回理論構築研究部会発表レジメ」、2003

(4)全体協議と課題

最後に自己紹介を兼ねての感想等の意見交換を行った。ほとんどの参加者は、博物館職員ではなかったが、博物館における研究と展示ストーリー制作の関係や研究を支える科学研究費のしくみなどがよく分かり有意義な研究会であったとの感想が述べられた。また、特に山本氏の発表に関しては、学校現場と博物館の連携の困難さや「学校から見た博物館の存在の小ささ」等についての感想が数多くあった。今後もミュージアム・マネージメントを構成する「ミッション」「コレクション」「コミュニケーション」について、分野のバランスを考えて研究会を実施するよう計画しています。

今回は、将来構想検討委員会から理論構築研究部会への提案要請に基づくテーマについての研究会を予定しています。

(理論構築研究部会長 高安礼士)

研究部会活動報告
ミュージアム
文化研究部会
共催フォーラム
のご報告

テーマ：第1回 「バーチャルミュージアム～江本勝：水からの伝言～」
 第2回 光フォーラム講演会「森へ行こう」
 第3回 「光」

報告者：梶井 喜孝

はじめに

今回、ミュージアム文化研究部会と光フォーラム（別掲）との共催による講演会等を、研究部会の外部協力活動として、3回にわたって催し、側面より市民の文化活動、生涯学習活動を支援するとともに、新たな学会の活動分野を探るテストケースとして実施した。

第1回の光フォーラムは、今春の学会全国大会の特別企画として実施したように、もともとは、大会での会員研究発表にも関わりのある催し物であった。

共催団体の光フォーラムとは、研究発表で取り上げたコンピュータゲームの制作メンバーによる任意団体で、ゲーム制作の基本コンセプトである「殺さない。戦わない文化」を形とする為のフォーラムをその後も継続的に開催している。

今回、学会での研究発表との関連を継続的に見てゆくとする側面を持って、3回に亘って本研究部会との共催とした。

以下、3回の光フォーラムについて、回をおって概要をご報告します。

第1回光フォーラム

テーマ：「バーチャルミュージアム～江本勝：水からの伝言～」

日時：5月18日（日）14：00～17：00

場所：立教大学 7号館7101教室

内容：提案／バーチャルミュージアムとしてのコンピュータ・ゲーム
 ～バーチャルとリアルを結ぶ植林ソフト「リズムフォレスト」～

講演／江本勝：「水からの伝言」

パネルディスカッション／バーチャルとリアルを巡って

その他

参加者数：54名

第1回のフォーラムは、ゲーム制作関係者の今後の活動をどのように進めるのかと言う、試行的な側面もあり、当初の想定どおりには行かなかったようである。

しかし、講演内容にあるように、現在の科学の最先端の情報を提示し、その成果をもゲームのコンテンツに生かそうとする姿勢については、バーチャルな世界ではあるものの、ある種の展示情報の提示とも言えるのではないだろうか。

講演者の江本勝氏は、水の写真を撮る過程において、撮影者自らの意識の有り様が水の結晶の様々な形として映し込まれると言う現象を、映像を使って見事に語っておられた。

量子論の世界が、このような写真と水の結晶と言う組み合わせによって具体的な形で見ることができると言うのは、最新の科学の世界に対する分かりやすいプレゼンテーションとして、一考に値する手法ではないだろうか。

なお、今回のフォーラム運営にあたっては、立教大学の観光学部の学生諸君の支援を得ていると言う事を、感謝とともに、合わせてご報告いたします。



第2回光フォーラム

テーマ：光フォーラム講演会「森へ行こう」

日時：6月15日（日）14：00～16：30

場所：日本科学未来館7階ホール

内容：講演／中野良子（財団法人オイスカ総裁）：「オイスカの植林活動」
 デモ／植林ソフト「リズムフォレスト」

その他

参加者数：48名

今回と次回のフォーラム会場を日本科学未来館とする事となり、研究部会の共催と言う事で、学会事務局を通して会場の使用許可を受ける事とした。

場所柄、一般の見学者の中には、フォーラムの案

内を見て参加したという方もおられたようである。

講演は、アジア太平洋の国々に対して植林の活動をしておられる国際NGOのオイスカ総裁、中野良子氏による植林活動の紹介、タレント赤井英和さんの子どもの森計画での活動状況のビデオ上映などが行われた。

これは、ネットゲームの植林ソフトである「リズムフォレスト」の課金システムを通して、その一部がオイスカの活動資金となっている事との関連もあり、ゲームのバーチャルな世界と現実の植林活動との関係を物語っている事にもなっている。

なお、昨今、ミュージアムの分野でもバーチャルとリアルとの関係性については議論のある所で、ゲームソフトによるリアルとバーチャルとの関係付けについては、単にゲームをすると言う事だけではなく、実際に参加できるといったもう一段の工夫が必要であると感じられた。



第3回光フォーラム

テーマ：「光」

日時：7月21日（月・祝）14：00～16：30

場所：日本科学未来館 7階ホール

内容：講演／「光と子どもの感性」

講演者：七田チャイルドアカデミー 七田真校長
ワークショップ／教材を使って親子一緒に「右脳」遊びを楽しむ

その他

参加者数：166名

今回から、フォーラムの開催がお母さんのネットワークにより運営し、ゲーム制作関係者は、その支援に回ると言う方法で開催された。いわゆる、ミュージアムの世界で言う所の市民参加から市民参画への転換であるとも言える。

そのせいもあって、今回の参加者数は、これまでの実績に比べて約3倍増になっている。ここにも、市民による文化活動への積極的な参加意識が見て取れる。

講演内容については、長らく、子どもの感性教育に携わってこられた七田チャイルドアカデミーの七田真校長による講演で、ご自身が主宰されておられる教室での子どもの能力開発の状況や、子どもの教育問題、親子の関係、そして、広く子どもを取り巻く文化の問題等多岐にわたる話題であった。

講演後は、七田チャイルドアカデミーで使われている教材、ESPカードを使ったワークショップが開かれ、参加者全員がカードを手にし、親子共々、会場が一体感を感じる中で、楽しく「右脳」遊びを体験した。

なお、今回と前回の2回にわたって、会場となった日本科学未来館さんには、学会の活動と言う事で、会場使用に対するご配慮とともに、設備、資材の貸し出し等、種々お世話になりました。

この場を借りて、お礼と感謝を申し上げます。





など、検討すべき点も感じられたが、このような開催ノウハウと言う視点からの支援も考えられるのではないかな。

広報宣伝と言う点からは、学会のHPやお知らせの配布等が支援内容としてあげられる。今後は、運営面の条件整備を前提として、市民の文化活動の支援策としてのHPの活用と言う事も考えられるのではないだろうか。

これまで、ミュージアムは市民を迎え入れる所と見られていたが、今回の事例が示すように、市民による積極的な文化活動、生涯学習が行われるようになり、単に施設の提供に留まらずに、より積極的に市民とともに文化活動、生涯学習活動に関わると言う方向性が求められてきているのではないだろうか。

開催内容の企画から実施・運営まで、そのプロセスをともに体験する中で、市民も学芸員も共に何かを学び取り、より開かれた文化活動、生涯学習の拠点施設として、あるいは、市民の文化活動や生涯学習活動を支援する学芸員の有り様など、学芸員自らの研究成果の発表の場としてのミュージアムから、広く市民の文化活動、生涯学習活動を支援するミュージアムの活動についても、一考に値するのではないだろうか。

今回の光フォーラム開催に対する共催と言う本研究部会の活動を通して、これからのミュージアム・マネジメントのあり方が問われている一端を見た思いであった。

(報告：梶井喜孝)

全体を通して～文化活動の支援と学会活動～

以上、3回にわたって開催された市民による「光フォーラム」を、ミュージアム文化研究部会が共催し、その開催状況を見てきた。

これまでの開催趣旨や市民の文化・生涯学習活動を、学会活動の一環として積極的に支援すると言う事は、ある意味では、ミュージアム活動を司っている学芸員が担うべき分野として、取り上げる事ができるのではないかと感じられる。

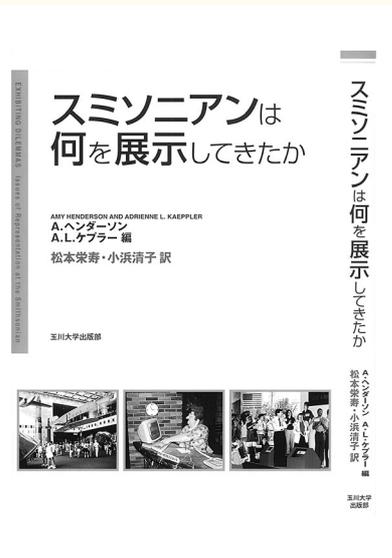
会場となった日本科学未来館でも、条件が合えばホールの使用を一般に貸し出しておられるように、ミュージアムの付属施設であるホールや会議室、あるいは工作室と行ったスペースを、市民に対して積極的に開放するという方向性が求められていると言えるのではないかな。

また、運営方法等については、市民の自主的な開催であり、一部不馴れな所もあり、時間管理や進行

新刊紹介

『スミソニアンは何を展示してきたか』

A・ヘンダーソン、A・L・ケプラー編、松本栄寿、小浜清子訳
水嶋英治（JMMA幹事）
本体価格…4,200円十税
ISBN…4-472-40295-5



最近の松本は元気がいい。次々と著作を発表している。つい先日、玉川大学出版部から三冊の本が送られてきた。そのうち二冊はなんと、松本栄寿と小浜清子共訳による翻訳であった。『スミソニアンは何を展示してきたか』と『フランスの博物館と図書館』である。すでに入手して読まれた方も多いと思うが、訳者の松本氏から直接頼まれたのだから断るわけにもいかず、書評というよりも水先案内人として本書を紹介しておきたい。謹呈されたご厚意に対し、また松本・小浜両氏の努力に敬意を表し、『スミソニアンは何を展示してきたか』を取り上げてみよう、私の御礼として……。

原題は Exhibiting Dilemmas : Issues of

Representation at the Smithsonianである。展示してきたか、という部分は英語では現在進行形または「～展示すること」の名詞形であるが、邦訳では「～してきたか」と現在完了形となっている。これからも、博物館の世界では展示の行為によってジレンマが生じるであろうから、本来ならば「展示していくのだろうか」という未来形を含むものでなければならぬ。進退両難、精神的葛藤は、学芸員の展示哲学と社会の認識とのズレから生じるのだが、それを改めて知らしめてくれるのが本書である。訳者あとがきに記されているように「単なる内情暴露本」ではない。「博物館展示の本質に踏み込み、スミソニアンと学芸員が何故そんなモノに挑戦したか、どう意味づけて、どんな手法を取り入れたか」を述べている。百聞は一見に如かずというものの、見ていない輩であっても、展示のジレンマと学芸員の苦悩には同感するに違いない。

さて、本書は二部構成になっている。前半のジレンマは「展示」のジレンマ、後半部のそれは「学芸員」のジレンマである。前後、各6章のジレンマがオンパレードで構成されている。著者は国立自然史博物館、アメリカ歴史博物館、航空宇宙博物館などの学芸員たちである。登場する展示も様々である。戦争にまつわる「記憶の展示」、絵画の新解釈をめぐる「アメリカ西部展」、呪われた「ホープ・ダイヤモンド」、原始的な芸術品が問われた「民族誌的彫刻」、英米間の論争となった「ライト兄弟の飛行機」、贋物の価値を論じた「水晶の頭蓋骨」など、良く言えばオムニバス形式、誇張して言えば博物館的（珍品の陳列室？）な内容である。「ウルワースのカウンター」「バンカーの椅子」「ズーニーの彫像」「エスキモー展」「昆虫園」「デ

ユーク・エリントン」など、続くこと、続くこと。ぜひお試しあれ。16名の著者が豪筆を奮っているのだから。

私の経験からすると、こういう翻訳はかなりやりにくい。各著者はそれぞれの志向性と思考方法があり、文化的背景も、極論すれば教育的バックグラウンドも異なるため、一筋縄では訳出が難しいのである。それが面白さと言ってしまえば、それまでだが、ここで注意を喚起しておかなければならない。それは読み方である。本書の場合、一日一章を旨とするべし。

というのは、多くの博物館と展示が登場する。これを読んだら、一日で複数の展覧会を見たように、疲労以上に、頭の整理ができていく。「其の有らゆる深きむね、亦、一に十を斯に尽しつ」（三蔵法師伝）読書すれば、秋の夜長もまた楽しからずというもの。つまり、この本と12日間はお付き合いするべし、なのだ。しかし、その効果は向こう12年間の展示哲学の土台になること間違いない。自分なりの整理をした上で次に進むこと、これ鉄則也。たかがスミソニアンかも知れない。されどスミソニアンなのだ。

最近の松本は「電気計測の歴史200年」なる書籍をまとめた、と意気込んでいる。一企業を卒業（？）して、現在では日本計量史学会・理事となっている。この秋にはフランス、アメリカ（もちろんスミソニアン）で研究のために数ヶ月を過ごしたらしい。

光明帝に仕えた東漢の武将・馬援のごとく「老いてますます壮ん」な松本である。もっと多くの外国事情を日本に伝えてもらいたい。
(常磐大学教授 水嶋 英治)

i n f o r m a t i o n

◆事務局のメールアドレスを新設しました◆

事務局のメールアドレスを新たに開設いたしました。

メールアドレスは以下の通りです。

事務局にご連絡の際は、こちらのアドレスもお使いいただけますので、よろしくお願いいたします。

kanri@jmma.net

◆年会費納入のお願い◆

会費未納の方は下記口座までお早めに納入下さいますようお願いいたします。

請求書・領収書等が必要な方は事務局までご連絡下さい。

なお、個人会員の皆様は、トラブル防止のため、お振込みの際は必ずご登録者のお名前を明記の上ご入金下さい。

郵便局の場合 口座番号00160-9-123703

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

銀行の場合 みずほ銀行 鶯谷支店 普通預金 No.1740890

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

◆文献寄贈のお知らせ◆

以下のように文献を寄贈していただきました。(平成15年7月1日～10月31日)

- ・みんなの博物館 マネジメント・ミュージアムの時代(諸岡博熊著) 株式会社日本地域社会研究所
- ・フランスの美術館・博物館(ジャック・サロワ著・波多野宏之/永尾信之訳) 株式会社白水社
- ・国立民族学博物館 博物館教育国際シンポジウム 自由な学びを支援するには
—英米の博物館事例に探る— 講演記録・論文集 国立民族学博物館民族学研究開発センター
- ・博物館実習報告書(2002年度) 東京家政大学文学部心理教育学科
- ・プラネタリウム会報74号 日本プラネタリウム研究会
- ・伊能忠敬記念館年報第4号 伊能忠敬記念館

u o i t e w j o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

上山 信一 大阪市立大学大学院
岡田 努 郡山市ふれあい科学館
黒岩 啓子 海外移住資料館
所澤 麻衣子 中村展設株式会社
田中 郁雄 財団法人府中文化振興財団
千葉 啓子 感覚ミュージアム
山田 和彦 日本たばこ産業株式会社
山戸 基弘 国立歴史民俗博物館

【学生会員】

井上 肇 埼玉大学大学院
及川 真理 日本大学文理学部
小林 良子 新潟大学
佐藤 由生子 東海大学大学院
田口 正夫 北海道大学大学院
中村 喜代子 千葉大学大学院
山田 菜緒子 Department of Recreation and Park
Administration, Indiana University
若園 雄志郎 早稲田大学大学院
(五十音順・敬称略)

JMMA会報 No. 30 (Vol. 8 No. 2)

発行日 2003年10月31日

事務局 〒108-0023 東京都港区芝浦4-6-4 トウセン芝浦ビル2F TEL/FAX 03-3455-1505